

依之黄金十兩被下置候旨、奉行中申渡、父子の者罷出致頂戴候。難有御惠の程難盡言語候。直に大野木宅へ父子共罷越、右の趣申述候に付、兩人へ料理爲給候。拜領の金子は大野木家來田中與三右衛門と申者へ預け置、時々用事の時分、段々に受取申度旨相願候に付、是も尤の事に相聞え候に付任其願候。六助事は去年以來の儀に付、如何存寄候や、妻致離別候に付、此度不及貪着候事。

一、異國人房州浦へ上陸

元文四年五月廿五日、房州浦へ異國人罷越候事。御勘定頭神谷志摩守紙面の寫。

去朔日申上候原新六郎御代官所、房州天津村浦方府入と申所へ、異國人と相見え申者、先月廿五日九時、長さ四間横一間餘、深さ五尺計の黒色の傳馬船に乗り、陸へ水取に上り候に付、見懸候者并名主并組頭招呼、新六郎猶又様子相尋候處、左の通に御座候。

右浦方網屋に住居仕候獵師の内、太郎兵衛・萬右衛門と申者、網屋に居合候所、異國人八人船より上り、春慶色の高さ五尺餘り、廻り五尺計の桶を持來り、右兩人并戸際に汲置候

水を桶に入、猶又釣瓶にて汲入候。仕廻候間頭立候もの、絲につらぬき候玉十七連、外に玉七つ指置、中音に物申し目禮いたし候得共、言葉不通候由。并戸際太郎兵衛家上り口に一人腰懸け、側に有之煙草盆引よせ、盆に有之煙草を飲候由。家僕市右衛門と申者の戸口に指置蘿藤四五本取候て、銀の様成物指置候。右兩人地主五郎助儀、早速本村名主組頭へ爲知に罷越候内、船乗出し候に付、獵船にて追かけ候へども難追付、其内元船へ乗移候。船の長さ二里餘を隔て申に付、遠目鏡を以て見申候處、長さ七八間横四五間、腰廻黒く少し赤く見請候由。人數二三十人も乗候舩にて、出船の時鐵炮を放ち、南の方へ走行候。

一、右八人の内一人、頭立候者と見え候。鑄鉢の如くなる縁のそり反り候黒き笠をかぶり、腰にきせる筒の様成物をさげ候。外七人は水籠の形いたし候黒色・柿色の、毛織と見え候頭巾をかぶり候。右頭立候者の指圖を請候舩に相見え候由。着用の物は何れも羅紗毛氈の類にて、小手袖にいたし、黒裁着の様成物を着、黒履をはき、其上に黒き羽織の様成物の裙四所程明け、膝迄懸り候を上におほひにいたし、

胸板の所ぼたんじめにいたし候。八人共長け六尺餘にて、頭巾取候者の髪の毛薄赤く短、髭少々相見え候。顔色は日本人に相替儀無之候。目の色薄赤く猿眼にて、不見馴人舩に付恐敷存じ、捕候意付は無之、本村名主組頭并所の者共、宿五六町隔り候所へ告參候内、出船いたし候由。右名主組頭并所の者共申趣、書面の通りに御座候。尤玉并銀の様成物の外に、指置候品無御座候。此方より遣候品も無之由申候。此外疑敷儀も不相聞候旨新六郎申聞候。右の舩は阿蘭陀人にて可有之候や、則指置候品三袋并見懸候船の繪圖一枚、異國人の繪一枚差上申候。以上。

一、無人島漂流綺談

江戸御城下堀江町宮本善八船。

沖船頭富藏 楫取武兵衛 水主十五人 六助 次郎兵衛

庄兵衛 六次郎 傳次郎 長兵衛 次郎兵衛 源丞 宇

八 權兵衛 吉十郎 増水主 八右衛門 加兵衛 門三郎 已之助

右の者共去年午七月江戸出船、八月南部八戸湊より荷物買請、段々漕參候處、房州淵之崎邊にて難風に逢ひ、無人島へ致漂着候。先達て無人島に致流寓候遠州荒井町の者三人召

連、無人島より八丈島へ渡り、八丈嶋御用船にて今年江戸

へ致參着候。 引取人等品々御代官齋藤喜三郎書

六月五日

右の趣御勘定頭神谷志摩守より、町奉行石河土佐守役所へ申來に付、即日宮本善八呼出、引取人等を八丈島御代官齋藤喜三郎へ指遣候、三人の者へ各錢三貫文被下候。

一、宮本善八船に十七人乗之、去年七月南部へ米買出しに致出船候。八月南部八戸湊より米積出し、房州淵の崎迄罷越候處、逢難風候て傳馬船に乘替候所、不存寄無人島へ致漂流候。其所に髮髭冷敷く、身には鳥の毛をまとひ候もの三人罷出、言葉をかけ候に付、十七人の者共甚驚き、化物か天狗かと存じ逃去可申と仕候所に、又々言葉をかけ申候。其音聲は形相とは違ひ、何れも能通じ候故、間近く出合候へば、先年の儀にて何年過候や、春秋の分も不相知候。遠州荒井の船頭以下十二人乗候て致出船候處、難風に逢候て三人は溺死、残は傳馬船に乘移り九人は命あつて此島へ漂着候。然共無人島にて四方一里計、高さ三尺計有之候。大波等にて死可申候へ共、其儀は覺悟相極此島へ九人上り、傳馬船